

美術家の昨今

(九) 黒田清輝氏(二)

「男爵原田・道氏の次男に直次郎といふ人があつた。元は高橋由一氏の門人で、久しくドイツに留學して居つたが、歸朝後脊髓病に罹つて病褥にある事五年にして死んだ。今年で丁度十年目になる。此の人は我等より言へば先輩に當る人で、畫道にも熱心で、其時代の成功者である。所で一道男の孫に、未だ二十二ではあるが特志の人があつて、伯父の爲めに何か紀念の祭りをしたいと言ふので、先頃故人の親友なる森鷗外博士に謀つた。森君からまた私達に相談されたので、友人の義務としても盡力せねばならぬが、折悪しく夏休みなので其儘となり、休みが済むだら諸君と相談して十二月の命日を期し、故人の作品を集めて展覽會やうのものを開きたいと思ふて居る。一方には故人のため、又一方には今日の學生達にとつて少からず參考になるであらう。夫は夫として私は平日餘り勉強せぬ。學校の事業に追はれて、本職には却て不忠實になり勝ちだ。私の一番勉強する時は夏休みであるが、本年は半分以上を豫てより頼まれものゝ仕事に費して、自分の仕事が非常に後れた。昨今漸く仕上げも終つて、描かふと思ふものも考へ得るから少し勉強したい積りだ。

文部省への出品は從來一年中の作の中二二を選んで出す事になつて居て、いつもあつけないもの許りだ。あつけない所に趣味をもつて居る私は、自分の氣に入つたものを人に見せたいのである。今年は三枚一人で出すと言ふ制限だから、今迄の作の中で理學博士寺尾壽先生の肖像と鐵砲百合を中心として庭の花圃を描いたものを出すつもり

である、共に小さいものである。もう一枚のは今度描くのでそれはどうなるか未だ定ま<sup>き</sup>つて居ない。」（完）（皓生）

〔『読売新聞』明治四二年九月二日〕

明治三二年に三六歳で没した洋画家、原田直次郎の追悼会は明治四二年一月二八日に上野精養軒にて行なわれ、遺作が東京美術学校で陳列された。森鷗外の日記（『鷗外全集』第三五巻岩波書店昭和五〇年一月）によれば、本文献が掲載される二ヶ月前の七月一日に鷗外は原田の甥である熊雄の相談を受け、その翌々日の一三日には黒田へ話を持ちかけている。開催の経緯については、鷗外も「原田直次郎の記念会に就いて」（『国民新聞』明治四二年一月二七日）で談話を載せている。なお同会のすぐ後、原田作品の図版や諸家の追悼文等を取めた『原田先生記念帖』（審美書院明治四三年一月）が出版され、黒田もこれに一文を寄せている（『絵画の将来』所収）。